



日本ジャズ体操協会

発足の準備に

奔走する

真浦良純さん

真浦良純氏プロフィール
1929年9月4日生まれ 東京
外国語大学英語学科卒業後、
主婦と生活社、光文社を経て
現在、スポーツ関係の出版社
プレスギムナステカ代表取締役。
4月に発足する日本ジャズ体操協会
の発起人。またジャズ体操の別称
「ジャギー」の名付け親でもある。

「まず、編集の仕事をなさっている真浦さんがジャズ体操に出会ったきっかけからお聞かせ願えますか。」

真浦 「きっかけを話す前に、ちょっと説明が必要なんです。78年に、オーストリアのグラーツ大学から筑波大学に客員教授として来ていたヨゼフ・レクラ先生という人が、日本の大学批判を新聞で発表しましたね。こりやおもしろそうなんだなと思いい、彼に会いに行こうと思ったんです。」

「実際にお会いになってどうでしたか。」
真浦 「彼の専門は理論的体育学で、情報学の権威でもあります。しかし、彼は学者としての研究以上に指導者としての研究にも力を注いでいて、「スポーツをする人には血の通った指導が不可欠なんだ」と常に主張している人です。」

「そんな彼にとっては、日本の大学の教師と学生の関係が信じられなかったようです。私も彼と同じ意見でしたから、会って話をするうちに意気投合しちゃってね。それ以後、彼は私に、世界のスポーツの状況を知る場を数多く紹介してくれました。」

「世界のスポーツの状況を知る場というところ……」
真浦 「国際スポーツ指導者方法研究集会というのがあって、私は78年のその集会に彼と一緒に出席しました。」

「その集会というのはどんな形式のものなんでしょうか。」
真浦 「世界各国から指導者が集まって、体操ならドイツやスウェーデンの一流といわれる人を講師として、講習会みたいなことをするわけです。そこで、ジャズ体操の創始者といわれるスウェーデンの

モニカ・ベックマン女史を彼から紹介されたわけですか。」

「どんな女性でしたか。」
真浦 「現代の体操としてのジャズ体操を開発した先駆者だけあって、体育について、前向きであり、常に世界の状況を把握している人ですね。そういう点ではレクラ先生と同様、哲学をもった人です。」

「その集会で彼女はジャズ体操を指導していたわけですか。」
真浦 「ええ、それが、私たち日本人の感覚からすれば、どうしても体操という位置づけができないんですね。やっぱりあれはダンスだろうって思うわけです。」

「それについて彼女は何か？」
真浦 「一蹴されました。「ダンスは人に見せるもの、体操は自分の身心のため」と。しかし、それから始まって、ジャズ体操について、彼女と私は講習会の会場になった体育館の隅で夜中の2時まで話をしていました。話をしたというより、彼女がジャズ体操について私にわかるまで説明してくれたわけなんです。疲れているにもかかわらず、嫌な顔ひとつせず教えてくれました。」

「ジャズ体操とはひとことというところ……」
真浦 「自然な動きの中での充実感の高揚と体づくり、ボディコントロールと体力の向上、心肺機能の増進、いきいきと体を動かす楽しさ、疲労回復……こんなところでしょう。」

「ジャズ体操にジャギーという愛称をつけ、日本に普及しようと思立ったのはどういった点からですか。」
真浦 「日本という体操というと軍隊式の号令で体を動かし、ラジオ体操ひとつと

とってみても、おもしろくないものばかりです。周りをちよっと見渡しても恐ろしく時代遅れだと思ったんです。子供から老人までが楽しめる、かつ現代の社会状況にあったスポーツだと思ったからです。」

「ところで近々日本ジャズ体操協会ができるとうかがったのですか。」
真浦 「ええ、東京女子体育大学長の西田泰介先生を中心に、チームに関係なく、正確に指導、普及して行きたいと考えています。ですから協会の当面の仕事は指導者養成です。」

「スポーツに限らず、本物が要求される時代ですからね。ぜひ頑張ってください。」
最後に、WSPF Japan についてコメントをいただきましたか。」

真浦 「女性スポーツブームも峠を越したという気がします。これからは「ただ気分がスカッとするから」とか「健康にいいから」とかという感覚だけでスポーツに取り組むのではなく、「生活科学」としてスポーツをしていくべきではないかと思っています。」

「人それぞれ、いろいろな面で個人差があるわけですから、自分にとって有効なスポーツは何か、を論理性をもって考えてほしいですね。スポーツは、衣食住と同じように人間の生活の中で重要な役割をもつと私は確信していますから……」

「そして、時代の流れにふさわしく、スポーツを考える場として、WSPF Japan が発足したわけですから、こういう場をフルに利用して、賢いスポーツウーマンになってほしいですね。」